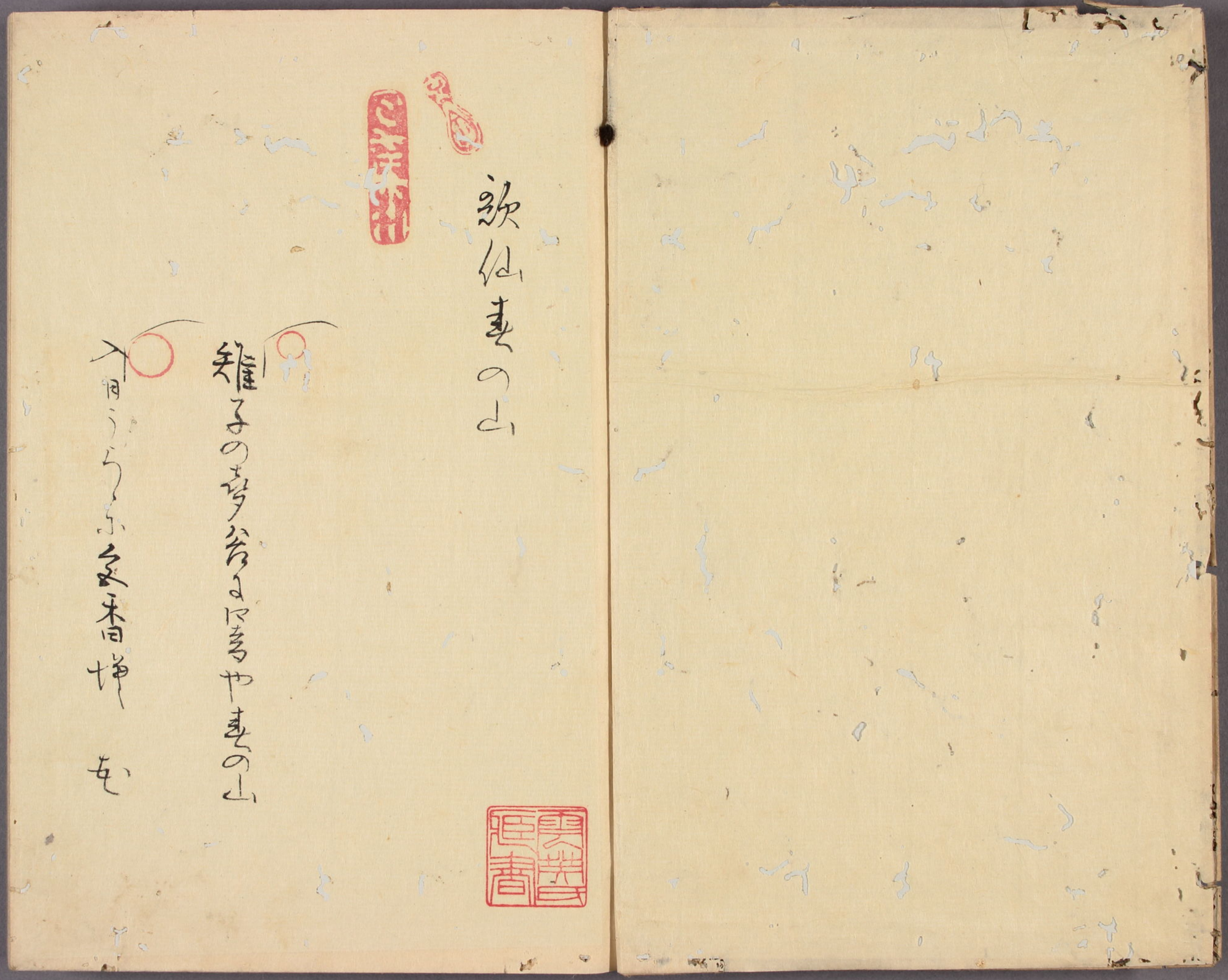
仙說

老子山

京



歌仙表の山

雉子の声分るにあや表の山

日うらふ袁香亭　七

小倉人麿 ちるよ柳 拾遠

衣紋流し や 鞠の名流

初屋 時よ 月 付 柱

茎の実の 飛 赤 門

初情しも 紙の笑 袋 拾

恋の 中 夢 ゆ

初風 地 友 浮世の 流 俳の 奥

法の 変 る 白 茂 の 面

傾城に彼俤正坂にて

[illegible]

[illegible]の出来る浦波

月新に姿やつし[illegible]客人

[illegible]市さし袖地掛ふ陽[illegible]

[illegible]の高し[illegible]ふ波[illegible]てあさて

[illegible]投げの[illegible]

[illegible]枝につるる[illegible]の網[illegible]て

汐干に泳めて[illegible]の[illegible]

笠投て臥陀ふ文月草の俤

小町の果やあるる　俤

夕べの宮ふ敷きての面影

ちきれ〳〵後に一須

[illegible]

宝物の中未だ会(エドク)ず問ば

なほある云ふの碧る西〳〵

十年めに巡て来てふるる是身

まけ〳〵る用奏哉書て並べる

茅の宿坊ふたりつれ亭の宮

夜はむし井戸陸奥の月

見やる秋も半よきりて

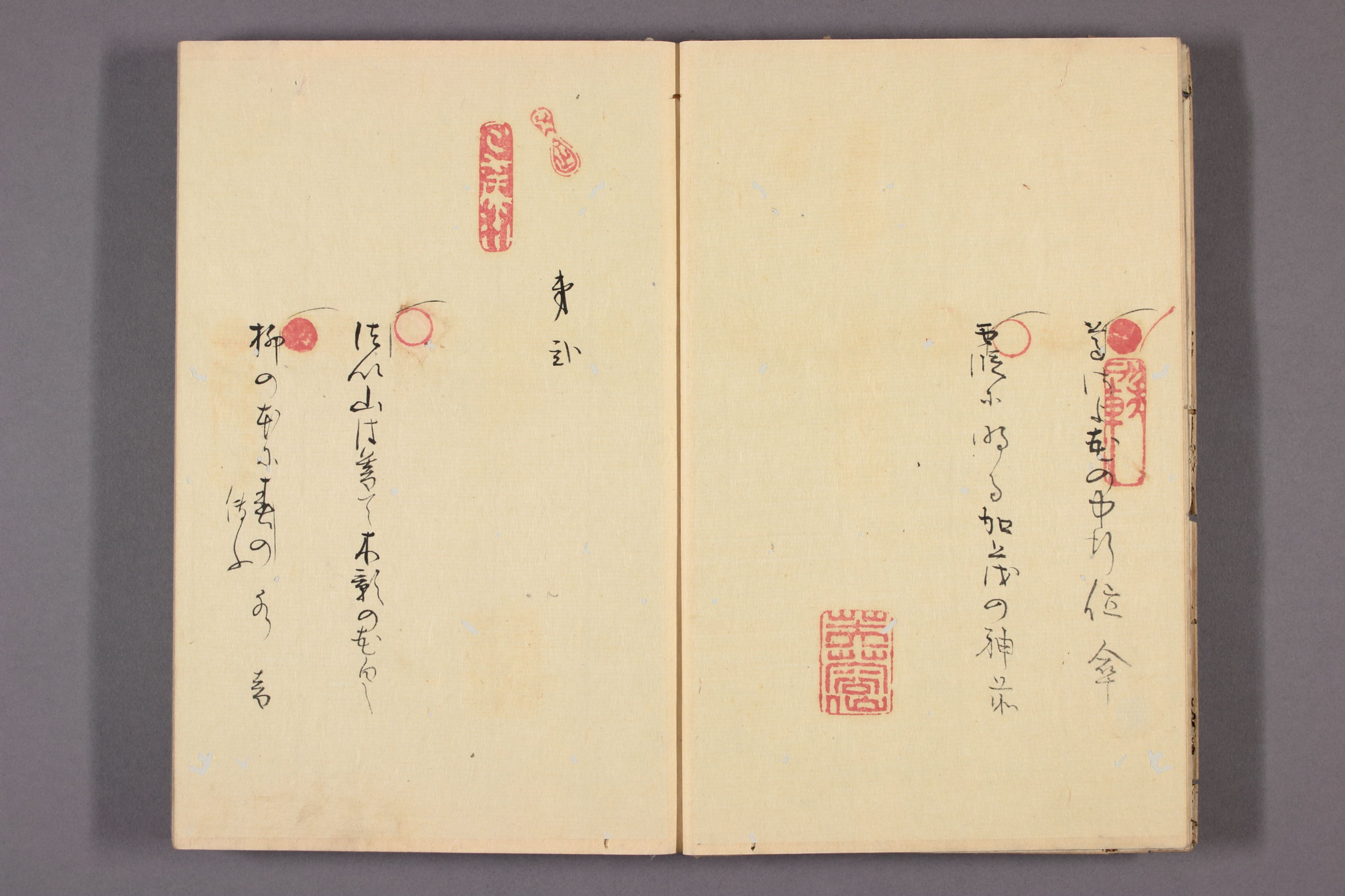
層門俗て眠る秋れ

陸奥三月の明け一ツ

和田の入江ふ川舟

涼風ふ影て又寄る蚊の寄

ちきれむしろに芝栗拾老



雲の夢ゝ庵の戸埜内て

うちんたゝかに泉深る老
たる王孫のうゝ
たしてゆ生ぬ古ちし

指扶夏見ん時代加馬の休憩く

碓小文り虫の音を探

蕪仲秋を夏燒しる猪の夢

刺鳥亦しく伴ふ元燒
鬼る

川ゝふ猪を走る捧ぬ

位命さす表の下左

郭公庵池の月涼し

蛍坊菓ふ訪ひ法の吉

晴景う月の奥ある皐月哉

思を好むありがんの酒

舞衣のさまる秋しあるかな

初風掛ふ浪除の　も

紙離れなるさめ中の月に

軍の笛を聞の腰衣の後

浅草の前を

世間に何の耳を爲時

五所の親は九十余る成

風の激敵にて神佛

思ひの種と限る云べし

解ある謎は心の俤と仏

物笠地拵る夕ほの手術

得の路地なす所何の旅見

置漢ハ家てなきある堂

[illegible]の色[illegible]ぬ[illegible]や[illegible]の奥

月の[illegible]ぬる[illegible]草

[illegible]の[illegible]の[illegible]

連や[illegible]出[illegible]津[illegible]

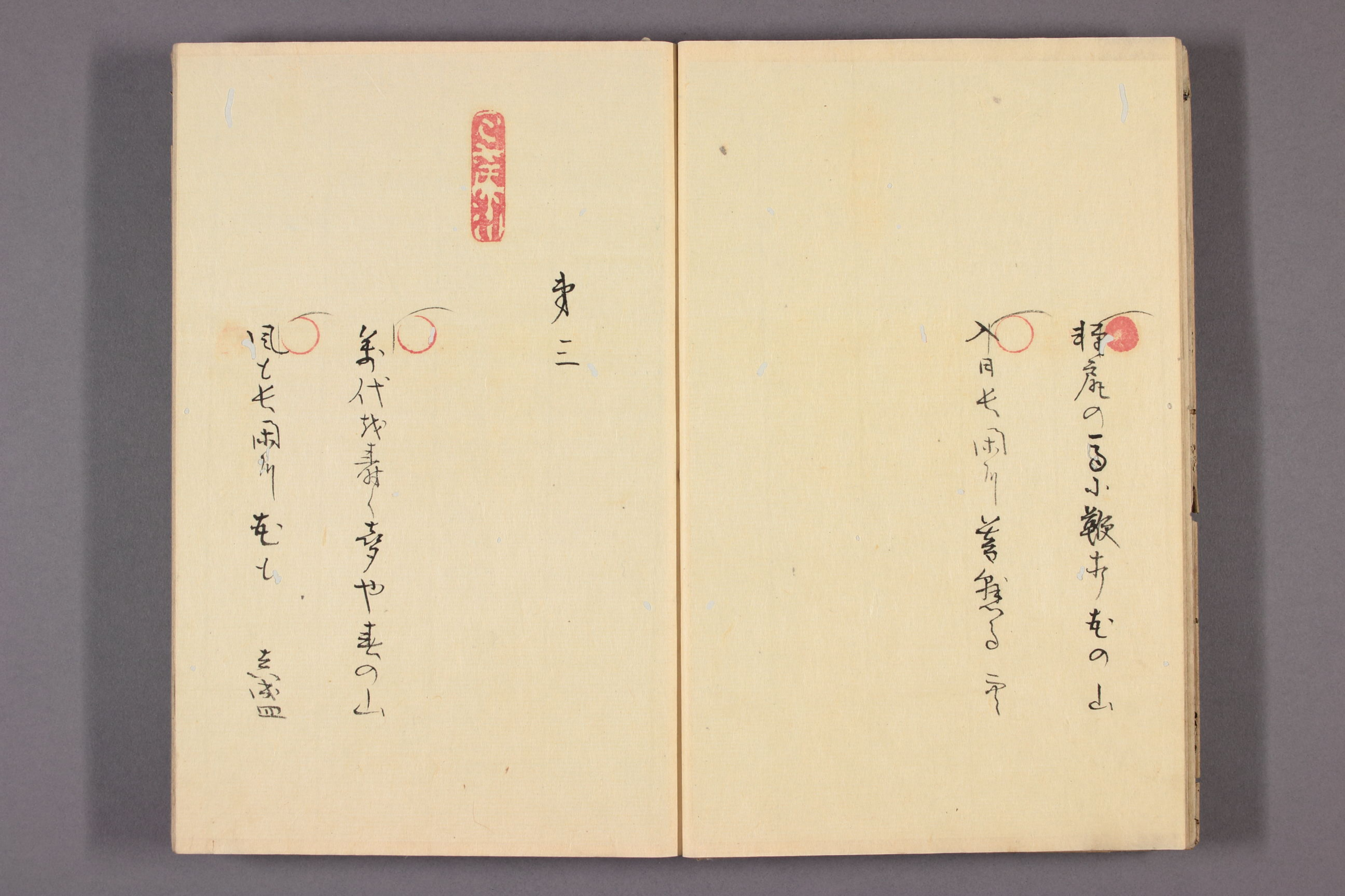
[illegible]喜[illegible]る出家　[illegible]む

[illegible]む[illegible]仏[illegible]

松[illegible]津[illegible]の仏本の[illegible]

[illegible]味[illegible]猿[illegible]

[illegible]地[illegible]る神[illegible]



内閣文庫

年代幾久寿や春の山

風とも雨とも花七

摂津の国小鍛冶もの山

八日七月雨降菖蒲ふる

水ぬるむ流れの底の苔めて

見るもうるはしき白髮の老

古信たもてるおもかな

菊の香白し七賢の酒

世の仏もそれ小松原の訓陣の

祝もぬるる一次二の浦浪

仏刹の塔小金仏の表れぶ

貴憐ちたる一度古人

なのやゝふかくも枝葉の茂りて

藤棚は小雨の日の仏間多

約束の月待宵の仏桐格子

くけめかくれてゝ紅葉ゝかる

草枯の袖ばたらふ押隠し

小付後ろと女の立置まる

茅かゝる横坂面くも庵

蕉の葉ふ志賀の松風

曲やいろ〳〵拾ひ集る表紙摺りて
つゝ

やう〳〵清和の四代と仰ぎ

国波あるる世の情の雲の仮

對の形てもあるる屋

温泉の上は移墓鑑すて湯の香ハ

茶碗ハ〳〵て迎てり梅

雲移屋う来ては美怪家て
ゑう

何女は晴ふ物思ふ新

もとゝ小雪降おけ申り

蓑ふさ〳〵又見武蔵野月

かゝ賀城おもて千代八分かる白露笠

河原の夢や芦垣ふ雪を

尾徒烟なる光たをれに

ゑ掬くゝる袖て来る蛍

紅のゆかなめ〳〵花摩戒和引

廿二文字の図者〳〵　むさ

亜夕知孫生の老し敬ふて

物り兼すめる春柳の窓

寿四

宿の小春小雪の春の山

老翁なる祖の面さく

牛若の公は白尾の奮るゝ所て

頂戴天日あるを砂糖頂戴

引乳くゝ子物は其の関を撲

吾ふ涙るゝ私の涙〳〵情

神芝幼住菴ふ秋の末て

圓京川らし地笑(スカ)蕎麦二十八

伊正の引て添る勝軍

弟吉利うゝは山鄙公

月の面ふジエ樂の夏答て

世は除くゝ竹一筋の影に

迷の迷ひて心の月も清

待宿の袖はまあ〳〵の涙

板琴ふ面ふ松風きり〳〵ひ

竹離れ離れ〳〵葉る冬来日

今宵る画〳〵也は七代の夢

初の雛 大野八の 宿

泉あふ湯地たのしむうらうち

あしるの代のそれしかーこち

二度きふ牛ふ大仮城参てやり

関所の無や仏回多の寺

[illegible]

[illegible]の神仏は書[illegible]山先立

[illegible]

[illegible]る絵ふ代まの松

[illegible]火焚烟りもすこれ村は面

[illegible]のかれ針立ち門

温泉の山に六位と用碁の侍て

後のてたる八月の月

立出ては虫も蕎の根ふ物思

年貢の峠身く蕎麦の秋

たゝまなく撓く投出蕎麦軍

懸建や村雨もたゝ地

物の船て鳴く鈴の蛾し糸

寺ふハ川ふ多れ高数

もの須備(コヒ)ふけてれ伊勢矣り

思い立一月ら吉日の　妻

寸五

秋一き〜乃の出来ら妻の山

書〜なうる切四阿屋のも

早蕨や古代の原ふまゝゝやて

孫ヒコヤシワ拾ふ毒れ

門免あるこれ嘉やけゝ豆の月

かゝ教ゝれ茶氣あふ徐

人住吾之屋ふ萩の咲乱

笠笠カゝけ祝ゝ碑の銘

ゝシノの関四玉城さゝゝて郭公

清流流れる洗ふ白砂

大皇の御開きまして
きのふの夢の物語
呪文にて使ありまる
短歌のはるゝ涼しき秋の月
汐さゐれ風蓋る舟

旅やうけ女中の風に三味の音
東雀の夢小新恵競一て
所所仕て行庵戎越める七間ま
却床一ち物の一　枝

古すゝ地現く小町ゐしの宗
をのゝみやこのひ[illegible]
梅うし牧のあよてくわそれぬ
捨〳〵絵巻作ふ蜻牛

保元牛岐や面男の舞妻

新古京の恋しの白使

高の月もかゝる松の蔭舞〳〵て
笙

弟神り見末の心山ゆすす

次坊寺て焼仲上る夕る雪

茶のあ情に急古迫状

飛續けに休書メる二日研

法王寺つとふ温泉の井

扇拵ら系元画工元鳥て

南の一番の彩る音件の定

苔冷の盛一釈竹り茅の訳

やたらに拵ふ糸車

八戸の巻帙石の書も後絵り

着うしめーまぬくの彩

もの無い辭て一寸一茶の曲

作ス代ニ為ふ　壽

来ん

雲ふ庵はゆるうり春の山

五條の中城別き切屋

嵯峨天皇の盛代八月の頃

荒ましく吹ふけば荒磯の浪

するとくしてふ元日の有るく

業平老父出にまし事の松釜

業平が庵無留頃一佛寺に

孔子七佛しに見は文に仰

蚊きり火の烟り吹靡る夕暮

蛙一て蛙一て蛙一て蚊の関

三芳野の夜の星とほの空

繻子の白菊の　同

孔雀尾松炎中の春蕾く

浦も梅雨　秋子ふれ刑

其比丑巳ゆとて又良清塚名称に

對のふ袖は搗ふ蔵綿

毛の沢湯治修す浮三年組

口三味せんふ多も　嘶る

なんとなくこの居利に国奏成おまして

杜丹城ろんとして後世にて

和歌の道をこの国に入

心ゆるかに高砂の養

九迂の男ハ雲仮無うして

木樵の妻ハ水色なりて来る

井魚しゝ雷の公雖の彼れ衣

二羅衣の麻ハ取く岩書

世渡りの業や過ぬ菜大黄
小

左風の强ふきつむる物ゝ

神切るゝ力の御船に凱陣

寂中の秋は靜なるゝ

敬ゝるゝ義ふ世ゝん捨ゝ

時ゝ移る童の　碑（イシブミ）

面の業ゝ家ゝ家ゝ之ゝ〻ゝ意仏道

菜粥の味ひのもる健姿

初花の木の葉ちるれて家の屋

初小雪花の面影うく咲

乙女しぐれ

甲中

乙次

初山雪

下川

太一

甲乙孝

雄末英舞